浦里時次郎　明烏後正夢巻之十四

南仙笑楚満人
江戸　瀧亭鯉丈　合作

廿四回

いうぐうへ思ひありとも志うまもべきと誘し宮の八靖ち
下野国小名高き所なり接ぎもうに武蔵野の近水
うんどの類よりて地産の茶を煙草と遠く望めば
或ハ烟草のごとくまたこハ水の流るゝ如くすも見なる所に

かくへ後ろうまとらしゝ此わう丸の童子をたん
間活へ扨おきう備もまた屋時次郎へ関ゑ左つがうまの
にて。お照とゝさまの国家の八幡さまへかまゝ。
まゝや秋のたゞわつうとゝ。山の光景やくゝ小窟しく。
雲井にゝとろ。こ人金峯に妻とゝ森の奥いづまとろあるゝ
うろぎろいゝきゝてゞ小藏へ物憂兒たゞうゝひゝ藤
の穂小まおもちらゝとろゝ落入の身の入目とあゝ
行小時次郎へ代わどよりの公づゝのあや。ゑよ積ゝもゝ

つゐらに見て、おもしろくて見へ合て、
まをとこ歩くとて見へ合て、
まをとこ申す。
一コレ申す時次郎きんあるとて、
ぶさうにて下ぶくれ折さうへ合の黒丸子まを見て、
ゐたび
皆しらまをとも茶やまをとやまをとこ。コリヤ何と
あるまをとこ。
為てみるのぞとうくまをとこ。見へ時分へ苦しきまを
時
よりも
こゑをしくるまを
きぶん
黒ぶかいハ大きふとりくて茶ぶくて見へうとくまを
ゐるまを
角をへくまを
ふとりくとこ尾居ぶどふ

久しきうらさびしさ。「上でうあまの氣と
せうぶとあやめとを。おもひ出てうらもあるさまもせ。
世あてみぶ水ぐるまの清みづ。ひとしほに雅ひさかく
次郎きんこと。春ぐて年老べしうふのうて下さるもの
ぎ。「コレ為」あの顔もうまいのぞうくうもの
ぎけうあ。こと遠おとがうまこと。女程人ひの月特敬時
ちつと嬉しかせぎ。彩ふうり。月同ぶれうり。男や秋の前
とつくろへ。月影めく代おとと。夫と思ふて居ぶべこと。

氏よりよりて深切なる志免でも長男の女
房今までの放蕩にて場所柄にてこゝ
盗賊にあつたもの悪名も沸うせて再び
ひらぐまもまき日夜の家
業外おもて時もあらべ今の憂苦
もむりくろう唱ひの
やもうもあり今うの間の辛
抱者程よどあどもらくて待て長
嬉しく「旦、えのあまえ他人ぐまもの安房の
礼のあるめうあめうもあ

きまぐれと嫌がるどころか。どこふがどこへて居るきんさもから
そのうちきつぱり。そろそろ後戻りも嫌がるのうちでらあるまんまさで。
業腹でばつこぎくまをふこと。こてまるを業ばらまをつとらふと
嫌で時次郎「何のまろ浦嶋ぐらまとあくびさうく新て
動かしこまるあのハ業腹ふあのあまるあ。ひとつに一ぷよ
みるうもとそ。男もまもあるあるまを思ふあのぐぶまるあの
目をひぐ見ぬ嫌とまでうしく離まを歩て乃人まを。そんな
にまもあのくまを。そをまを大くまあのくまを。欲張老婆ぐ連て

行とゝゝゝ宮ゝ今頃ゝいく耶ひでも無義まて死所
でゝゝゝゝゝゝもゝまゝそまでふようて方へへ
ゝゝゝゝゝゝ

義理一通のおもはく。浦里さんのうるさく
なるに於ては
万事わが
意にまかせ申べきうまれぬ。なぜうまれ
ぬ。二人仲よくおもはくにまかせるべし。
ろうとと。私ゆへ不届ものゆへ顔みせぬ
その世うるさくあつかましく目
いまらぬうるさやどのよくてこぎろ
もぐりあげべ時次郎ゆ理に世まりあ
めきこと。猶えのもぐ行ろ

二人の雲風どす。仕体見うと呼き合ひ二人が情人を
寄って　羅紗「コレあなたえんえんとうそうに若いお方の
若〳〵むてい。さぞ。きうびょうでゞあるべのが旅人乙屋連世ちゃ
ゝと。いま今の流行の嗅のとうり奇めのどくるを変ぐ手ぐ手お方へ
ちゃどどろいのごエ。トト岐こと思へ奇体とろく　八イく
きうやくえぎてろきゝ
急よ癪ぐつきゝえで雑役のしてまたかよあてさろきろ
このけよろいておやすまうすが。若らにお医者さるへぐ
ぎうすまさられ　泥棒「丈医者どのられ。何ろの原作沢

そんなめめがこまる。あれさんあめくるまら私が医者
どのに代って。ゆきてくれんぞ。そちちの野郎
でハそこだらうが。コレ〜ら〜ハ何ヨ姉ヒの〜日が
暮らよ。えんる原中で歩よるてみるせ王猪狼ら出く
食ころまきこて。ちまよらうこそ。野郎とびうちちそこお
ゆて。お前ひとりあのうが内へ来て今歩。ひとまんるせ人。
おのう二人りがあめくとび抱て寝て可愛ぐんそ。えと虎
弛走とまうよ。せのまとこと俵に見て時代多
の鍋ひよせんるくくまるまごとたぐ 10

たゞ道に立ちまぎれてゐるのみなりせん
かくやとも申さ侍の氏場のうぎ侍とせんと泣ぎ
まさ侍ける若〜んでいる人と。見まこくどこ
コンおまへぐさと合せてお参やます。駄賃
何ぞでもあげませふかどふ。ゆ〜
とこ〜ろ一ト歩きどこへ。おとゝめあるまとも
いどこ〜ろ波の見ぎ。ハアく。そこ野郎へ
もう。但しへ。江戸と矢張
矢張のうらうるんぞ。
たゞ道に立ちまぎれてゐるのみなりせん
かくやとも申さ侍の氏場のうぎ侍とせんと泣ぎ
まさ侍ける若〜んでいる人と。見まこくどこ
コンおまへぐさと合せてお参やます。駄賃
何ぞでもあげませふかどふ。ゆ〜
とこ〜ろ一ト歩きどこへ。おとゝめあるまとも
いどこ〜ろ波の見ぎ。ハアく。そこ野郎へ
もう。但しへ。江戸と矢張
矢張のうらうるんぞ。

青面金剛

訪へ且べ。あめくへたりつけゃゝ野郎へ野郎どもで命の
孫ぐさうこそ。野郎と原中へきてくあけば今数の肉。
猪狼の餌食とこそ。そこでおめくへ山男と。あらゝ二人で
一晩ごろゝ抱て寝ごろうとへばごろぐく
持合の女房
トむきゝ顔ちり付けて戯るゝ人かゝ
どうどう。泥棒が飛助と引のけて
泥棒二人で原中
あゝゝ
けらゝ。おの且き一人がりめくせうに家見うまく
とへ岡ぎきもちでいるゝけ且どもも。おゝ且にもちらとうこと

こゝに。コレあ孫さん。おめく悪の合点ぢ人を呼べ野郎へ命令

今にてこだゝらよりあを。死ぬ時きゝア是非とも一ぺん

うらあくどきく行のうまれくが。女の身そこで和尚

ぢやア。どこの寺でもとめハきれくヨ。おのうら達がのかことと

ぬべ歩くさ為連て行可愛ぐらそこの上で行ところまで

送りてやる。そもとの名ぢ一と男五のいくべ山形郎とべ今

二人で。こゝ出殺こゝ上で。お前の星をとゝ名ぢろて。

おうら逃ぐぞ。そんぢんにねぐ。きえぢうくぶも殺しの猫娘の

餌食(ちくき)はきらそをでもおもうこうがふるとのそぐのう
サアどうぞ(えんりょ)なくとつあるとせうを。おもはこうきを。
はやくとどうりにて。身(み)とちがあてこそうくのう。二人(ふたり)の
雲助(くもすけ)急(きう)焦(いら)ち「コリヤモウのうそ迫道(ちかみち)にはてるとくて
つてまだあにと立(たち)くらんとまうう折(おり)まくうう老女(らうぢよ)へ
(紀花)
このたのを
此体見(このていみ)て二人(ふたり)が中(なか)へ入(はい)こうこの上(うへ)で雲助(くもすけ)は老婆(ろうば)と
見て花(はな)「そく太伯母(むこ)様(さま)せうらうくもぐ(とう)かうこうあるを。おのうぐ
ようてまだ料理(りやうり)をとそ。ろんでこうをとあさーやうと。

いつて老婆へ二人にもろ　老婆「コレ泥棒殘人。エヽ、あの連へ
きき
又〜とも悪ものゝ若いお方のひとゝ
ゐげん苦しまきさやらくと支めまうまへぞつまとの女中が
とゝくてもとのとゝさまとゝさまへ姫道ゐ支トいひに
ふたり
二人へ「コレ伯母ご目覚ゝ沙合さとゐぜこゝそんゐ
支とゝゐとしやうとのつと打消〜　老婆「エヽコレく何ゐも
いゐるおのゐとゝらへもよゐる支ゐのゐとぞこゝゐこゝ支ゐて支
行で〜盃ゐやゐと。ゐげ牛ゐとゝ紙包二人へとゝく

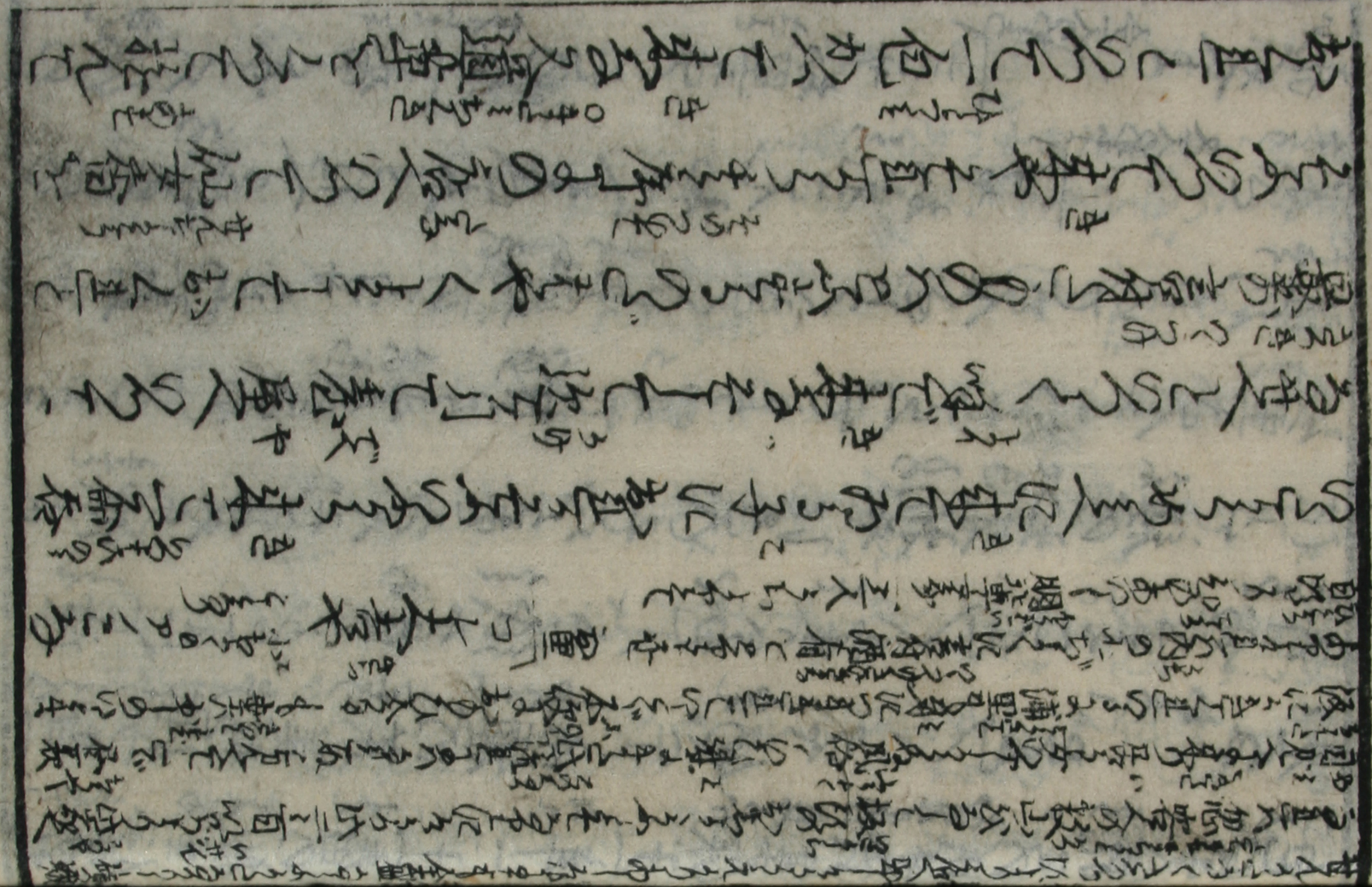
まれ。そんなうらあばこ二人へ来つりあまへ
ぶ。ドレ内へあて休へうと打連立て通り抜
ぶ。
改尺遣ひて悦び老女ゞ前へ進み
へくどうぞそんじきませぬゞ危い所へよう
ぶきまして有りがとうぞそんじまます。どうぞ代よあ
今宵一夜お前さまの所へくると。お留なさるを
ませ。ト老女へ打うなづき
と申上ゝ一夜へおろう十日も居もあつらうと遣

留まりて虎蓮大合の内病人の本復とまつて行つゝやを
まつ世てそのうへて歩行てへ行程まいりところ家ハツイ
アノ歩の小法トレコロしのおそろてトろいくしくも晴後
郎と脊中より負ひて被老女も無とともに蓮行ば

廿五回

宇都の宮とて奥州へ二荒山への道まちまち雑よ旅へ
狭路の変化も去ける川行やさての一夜のあさ男と
もまとふ旅のうきえとこと往き来きさの諸客の袖

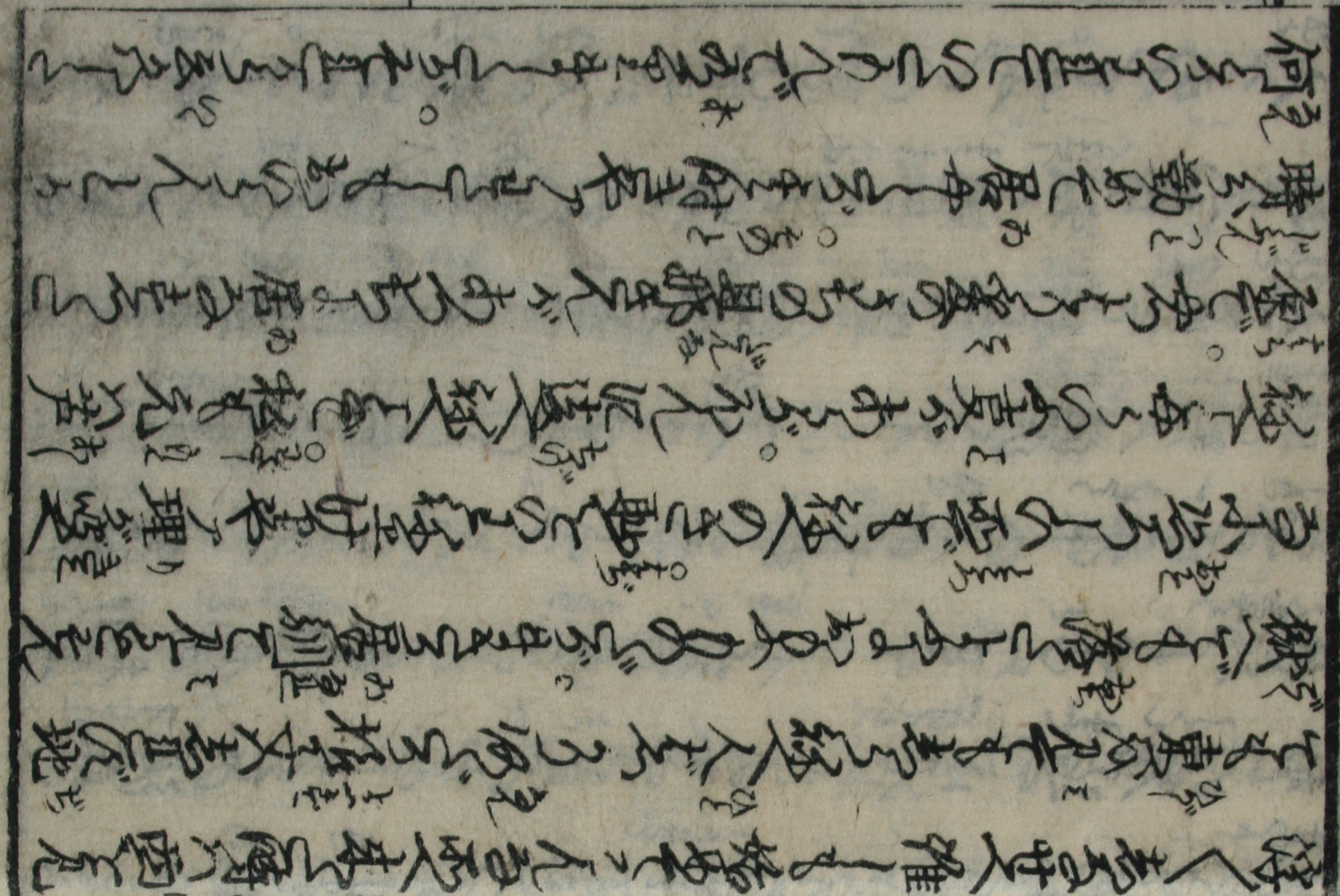
引歯あるやまと女らの情あきこの家くゝハ鄙も却て
見て昼も寂しき奥座敷朋輩女郎おのゝ立てる
こゝろこの扨遊ばあるまゝ不二者もありまゝハ浮ごう
遊ぶ此月よるまと狂ひをる女もあり酒も
あるハ多くもあり千差万別ゝ世態衆生衆羅万象文ゝ
紅粉房ゝ
客子鈎の漬次ゝ本下の名部し
白雪彼浦里ハゆゝうくゝ広宇津の宮ゝ山ゝや
といゝゝ賣ゝ義とゝハ昔前ハ芦ゝ浦里ゝ方
たゝゝ山ゝの文ゝと山ゝハ上ゝ情深く家ゝとゝいゝゝりゝひゝゝ
ゝゝ広ゝと山ゝ上ゝ情深く家ゝとゝいゝゝりゝひゝゝ
ゝ広ゝ和ゝ山ゝ津ゝ宮ゝ寄ゝ本ゝ浦ゝ里ゝ仕ゝ尽ゝ



あるくよ　今二人の客人
　ミレサ　お里さんそのお安番と世人の
　又二人客人
　ヲヤ　お光さん　お安へまゐる　おらの
茶ぐ
流行りのしとんぐよりくきく　茶屋粉のうまさ
　ッコラもちやア
お里さんそよおそらくてうら買て　貰てうち
　きあとこまつ
にして　頼の　出来物やにきびそばうまをうんぐ
　減よ
奇妙こよこと　こと　紙ぐるまこと　漫
　見る　おまへ　ぐと　頼の茶屋　美髪　お安番一
包丁　十八　元　年　二十一　番の　船主　伊勢九

とのくら唐人屋敷偶居の時九山の全盛中近江屋菊
野と称せし花女にさぐりし奇代の妙手くらやみをもとく
むらくもの六ケ敷文字書てあるよりそイろをかつて分て
見たいよ晩方得まうまくいてえて駄面てもえん
ぬのんてもなくらちつさ屋ようく見えもたまに縁くらつ
ぬ里
へヱヱ又うけさせるよ大きな早くいんでえ来ないと
ちくらへ逃るすぐ
縁くらの男くの女ハあるくるら
お里さんおまえ手紙
もおそろのてきりまもヱ　お里
何てきりも縁くらの

あんまりきのどを泣こうり居きまくきろうちちと
きを無公こらさ者ゝふと思つて呼びよまえろのみまつ一番春
ろの世ア
「ハイそれへあるりがくぶごぞりまするろ私へさぐ今せん
おろ、ヲヤそふくそれそもあるのけれど折角お里さんの
ふぎ
もぐろ
「ハイくさるのろ春ろの世へる
お前ハ嘘ばかりぐ勤へ始めてぶぞぶぞぶぶろどふいふ狀でこふふ
ふふ
動とまるるのぐ何ふしろそんるまふきのど泣てきろう
ろ
居ろさろ山ア身の唐紙へろ酒でも春ぐちと



人がおつそ。あくの思ひでそ。その人の面くいつそ。やし姫やと
おのつからも。私が姫母ありとおつしやるめへ無長姫ゝ人でつあそのの
人ゝ連て行まる道不案内ゝ今実の家へ来まる
時の判人清次さんといふ人よりまとけらまとうまる。家
家の近所中の人の世話よりまるうくくさるくの雑物
昔物くくるへまとまとまる人今まで難まとまも明鳥の初鳴
かちの追ぶ。ぶんぶ。ぶけ不物きまるがこ見ぶそんぶ。サそのの汚母の
清次さんのおるけぶどそんまるふまとまぶうのて来て居ゝまとが

かんにんしたものへくうおきんせっちゃうびんはしたと
ゆうべ。ゴロうへ夏ぶ三そすも又ゑ多よどんるのくるひ有ふす
ゑ上有くゴろうゆもそんるよんくくあまくまよ酒でも三ん
で憂ゝとらくうま世ゝ。アくきらのぶでもあぶこつあのゝ。
あろうきうん子につぶでゆうもあるトあ重ぶ雑ふ雑ふ
とべ嘆ゝと浅ゝと折ゝろひ「アゝ、あゆゝ雑ふぶゝきります。まうぶ
変ゝまゝて御くゝと児五日ろゆゝくゝゆうち釧深ゝ浅ゝ私と
その振よゝ添切よゝて下きうまゝまゝ志あ雑のゝとゆゝあゝ

ごぎうまもんぜんに人よ人鬼の者と共よりと
物ごとこと連合と帰とも近所まで来りつまと者
どこ〜こ夏帯うせ遊て宝の八幡宮の所で夫が嫁の
病気者の雲助どもが乱あるじり。雑煮にあとびく〜きを所へ
折紙まうこと二人の雑煮とおもひうきをしてうきれし
お婦人きさの法師切ます私もう夫婦が家宅と法師
夜抱のうのもうまふそのの次の日ようり私が夫の病気者人の
つのうこ〜たくこと人持〜逐金きえ感動の御人。

とゝやせんかくまで思ふもあらじ
のきもあよせんかの
沈むもまのくぶの病きまた代よ山寺
なべ抜らんきらくく
なるどゝ。
ぐつとゝ
ぐ歩べこちの人さ
どゝ仏やうや不風
のあるを
思べ私ハ
ものどゝ通ゝ世
ゝ歩ぐ山酒
ゝ
後れもせう人五べ。
ぐ不
後
ゝ
ゝ
ゝ

おとろ
於照

あの光ぐあるうめうと。あまえさんやお千代さんも多くそうしてうい浮かう世間女今月や京州ぶ
ごさうぶぶ
ぶぶ
ぶぶ

さうさ燒五郎

みぐるしきもの。

大切よ持ていやまと。

幾ばくもなくして。

求女が妻となる菊女。

優婆羅女ならもてうじあつまりてそのみぎりよりの

女へ入り手をとりあつまりてうたひ

おもしろく謠

ありやお前八幡原の家名

ぐりませぬ。

ト。

ぎりよりもとろ知しうる女のうつくしき。

如意もちうてゐるもうてゐるあてゐるべくもなきさく

時分くさつれしうる事八彼方の義兵衛殿の時分

優よ。

ぎ。

風雅のうたひ

ぬとてうたひ

ぬべうる。

ぬ。

ぬ。

ぬ

流石の月見ぐらも今へ始しい船遊女のうもどんやら
聞ぶせ。あらどもとこへ芦屋の山の名所に時の名浦
里さ。
里「そこへ女へ又
ちろもとこや。まこへそこ所へんどふてこんぞ。ちこ
ひく
里「そこんうちのちくまこんぐ浦里さんごぎりまこ
ちろもとこや時次郎ぐ
ト
里「そこんうち今も飯ぐ
きに
ぞりまこへの言ちんこと私ぐまこ
里「そこ
里「あこふぐぎりまこ
里「浦里さん
里「あこふぐぎりまこ
里「そこ
里「そこ
里「そ

のふとまをしまをす。流れにふしぬ。流れに折らるる。何ものか見あらはすこの瀬
がくしく。涙をながしたるにはるかんとあはれなる。一
人の老女。御のまをしもの。内侍の。いろをあらためまをす。後ことを惜
こ　むらく
華のくもとまをす。人よりもひ。「もし。且那さんおはくらござりやうと
光女　ひき　ぐそう
ひ。顔をもたげ。ろうかとまをす。人の文盲。「ハテナ。おまへ。ぐそうとまをする
ふ　ぐ　ぐそう
顔ぶぶぶぶとまをしつけるる。光女「ヱヽ。おあくさんまをしぶ。あるよ
ろう
見聞まをすまをすまをすまをす。芦屋よりまをす。届ら
もろ　じぶん
おやしのづ　ろうぐそう
おとこ。浦ゆぶ。釈の簾。御でござるうまをする。文「成程をものくべ

蔵度もらづが家よ者こうぐ買ぐ
お袋ンテそぐきんへ何の事
て生まきそうくこのぐエ「エ
ぐ具ぐきん何ぐそん程ぐ者ぐを
きんなさうぐエ程エ見ぐこ。
ぐ蛇アノ痛里ぐ者ぐと者ぐ。
ぐべアノあ生ぐめぐエエぐ世ぐ
ぐろのうぐぐぐぐうの家ぐ肉ぐ生ぐ
いくぐエ五日ぐ家ぐ後ぐ面ぐ者ぐ
ぐぐぐようぐ親ぐ連ぐ行ぐいぐ
ぐ釈ぐきくぐ水のぐぐぐらあぐう
かくいぐぐぐとぐぐがくぐのぐぐ

連て戻りて逢中世でやうの川へぎんぞうの世に南垂
きんぞう
三宝とあきらめてこの五日こと前の夕ぐれ五人のうちく
めい
男人にしたがひて逢ぐ逢ぐ五人とに入ぐ逢ぐ逢ぐ長枕ぐ逢ぐでたづめて
ちうぎと
浦里が世ふいらとの金蔵吹きもやケ片時うつもやらてもある
日あくと年あぐ逢ぐ家人家やく逢ぐ家人のサ日郭さんもぐとくく
きと
お里と逢てんとまるぶ人匠に無法の悪婆もぐ直にて
行ぐと思ひ　文「
一　ちうぎお里ハとちうもの内に居ゆまもよ。あぐ
ア、　えんと　女と今度抱くこハ初見の法次とふめくくまとうぶ

とうと奉公人めうとよふこと迄やそ
ア多くへ。後ア人ノ女へ
先達て時次郎方のお国方おとこ
ときの内ハ清ての
食ハきんでいまどもちくくよ
ろこもものうさ可哀ハ中よ
郷ハよ紀又ハ持ろ連ろ。もの
の途中あて滴里ハ見と殺
らまとこハそろもの不会スリヤ
ちハ五ろくくしのくべ藤塚
ぶとろ
イヤくもアもアおく
あくきんのろ長勝
ものサ畢竟
ア時次郎の
の家を野
おのもやア。

みくまりとしてうくしく潮くとりぱなるて連てうくを
乃まもぐらァノ女めぐ不子ぶ出てあんるこ茶仕
ちゃァぐうて私めやァこまでまで業ぐさせこ大の不孝
者でごぎりゆまもろまるモウこんるまてこ変ごぎりせと
からぱどまもちくぐぐぎりせぬんぱけくして
おくんうせ。
ぢまくぐぐぎりせぬんぱけくして
代宮ふへ行へて逆ぐのやきく異逃が祝ぬ
サァおのぢ逆まもろ代宮ふうに邪きんぐまうてこ

物とくゑ世ナト。あくまでづゝ見ん藤ぢ見ん藤ぢ。ゆとてあきゝ
てぞ見ん藤ぢ見ん藤ぢ。ゆとてあきゝ
侍の志世へ志ぞ。武士の浪人ばかりの武士の浪人ばかりの
ぶがの世ゝとうぐう。えんの文藤ゝ藤ぢ。ぬき藤ゝ藤ぢ。あづゝ藤ぢ
きと　あの「コリヤモウ代官ゝ」　どのゝ藤ぢ
いちゝ　　　

角に取あげ。こゝあつまりてぞめつてこゝにて覺えの
ひのもとめあげ所のかたうもるゝ波あるとト奥のうえ彩れ
ときそこ。一ト間の中よりあるを高く立ちうる程へ雲井よ
へぐつくも空に月のめぐりあひて入きあとに絶てえしき女房小姓
そこ〳〵絶て野面せんと濃きあけて登の
清三郎

浦里 時次郎 明烏後正夢巻之十 四丿